

研究ノート

子どもと若者を地域で育てる－里仁館 「親と子のサタデースクール」事業から

半田 結

子どもや若者、地域住民が自分たちの住む地域そのものと出会い、人々と互いに信頼関係を築いていくにはどうしたらいいのだろうか。また、地域での活動に参加することは学生自身にどのような影響を与え、また地域社会にどのような意味をもたらすのだろうか。

本論では、平成 17 年度から 3 年間にわたって、山形県による生涯学習施設里仁館への委託事業として行われた「親と子のサタデースクール」（以下、サタデースクール）を事例として、子どもや若者が地域社会のなかで信頼関係を築いていったそのプロセスを追いながら、地域で育てていくというその意味について考えていきたい。

「サタデースクール」は、幼児期の豊かな体験に基づいた体験がその後の成長に重要であるという考え方に基づいた就学前の幼児と保護者を対象とした子育て・家族支援の事業であるが、ボランティアに関わる大学生や地域の人々の存在、地域資源に根ざしたプログラムのユニークさから、子どもや若者を巻き込んだ地域づくりという点からもきわめて重要な示唆を与えてくれる。

1 親と子のサタデースクールとは

「サタデースクール」は、人間形成の基礎を培う上で重要な時期である幼児期の子どもを家庭・幼稚園・保育所・小学校等、地域の三者が一体となって共に育む「幼児共育」をすすめる事業のひとつである。自然・文化・芸術等による感動体験や地域の大人との交流を通して、人とのかかわりや家族のつながりを親子で実感し、子どもたちの健やかな成長を促すことを目的とした事業を運営すると同時に、「幼児共育に関する調査研究委員会」⁽¹⁾を設置して、本事業

をととした親子関係の変容や教育効果等について検証し、今後の幼児共育のす
すめ方に関する課題等を抽出するというものである。

平成 17 年度から、地域の自然・文化資源を利用した活動が年 20 回、3 年
間にわたって実践されてきており、平成 19 年度の講座内容は（表 1）のとお
りである。事業が始まった平成 17 年度から交流活動や体験活動といった大枠
の活動項目は変わっていない。

地域にある自然環境を活用した森の散策、魚釣り、磯遊び、泥んこ遊び、川
遊び、芋煮会、昔遊び、雪遊びなどは、季節を十分満喫できる。また地域の行
事や地域に伝わる遊びの他に、キッザニアなどのオリジナルな活動も取り入れ、
非常にバリエーション豊かな内容となっている。こうした活動が年間 20 回も
展開できるのは、それぞれの遊びや活動に精通している地域の協力者が多数い
るからである。うどん作りの専門家、植物から昆虫まで詳しい森の専門家、地
元に伝わる正月行事を教えてくれる郷土史家等々、講座ごとにその道の専門家
に協力してもらえるのは、この生涯学習施設「里仁館」との信頼関係によるも
のだろう。

講座の参加家族は、おおむね 25 組程度の募集ということであったが、この
講座は非常に人気があり、平成 19 年度の参加者は、抽選で選ばれた親子 48 組
（幼児 75 名、保護者 75 名）であった。

またスタッフは、通常、里仁館職員（4 名）、社会教育主事、講師、元幼稚園教諭、
大学教員、東北公益文科大学大学生（5 ～ 10 名程度）の 15 名前後で行われた。

2 スタッフが育つ

スタッフの役割は活動の準備から後片付けまで多岐にわたるが、それらを通
じて子育てを支援することである。スタッフの家族への関わり方で気をつけて
きたことは、関わり過ぎないということである。全部やってあげるのではなく、
保護者や子どもが活動を十分体験できるように方向づけるわずかのサポートを
心がけた。

スタッフは講座の前後のミーティングを行うことで全体の流れや注意事項、
各自の役割等を確認し、さらには良かった点や課題、個別支援が必要なケース

の確認などをして次回の講座に備えるという方法をとった。特に講座後のミーティングでは、お茶を飲みながらスタッフ全員で意見交換をし、その場に出された意見は次の講座にすぐ反映させるようにした。このような一人一人の意見が尊重されるということが、講座全体のきめ細かいサポートにつながったと考えられる。何気ないことに思えるが、一人一人が大切にされていると感じることはスタッフにとっても重要なことである。

この事業がはじまって以来、スタッフ間でことあるごとにいわれてきたことが「臨機応変に」ということである。天候により急遽屋内活動に変更しなければならないこともあれば、参加者の活動の様子を見ながら内容を変えた方がいいと判断することもある。また、新しい参加者や内容で展開の方向をはっきり詰めることができないこともある。そのような時、臨機応変に対応するように任せることができたのは、スタッフ間に信頼関係があったからである。

こうした信頼関係がはぐくまれたのは、前述したように一人一人が尊重されていること、体験を中心とした20回の講座の活動を通してスタッフもまた心や体がほぐれていき、20代から60代までのいろいろな立場・年齢のスタッフが、それぞれの持ち味を発揮できたことなどが大きいと考えられる。そのような活動の積み重ねと頻繁に行われたスタッフ間の意見交換が、「今、優先させるのは何か」という判断力を鍛え、柔軟な対応ができるようになったと思われる。こうしたスタッフ間の信頼関係と成長が、参加親子、地域ボランティアそれぞれが主体的に活動できることにつながっていった。

なかでも学生スタッフの成長には、目を見張るものがある。場に応じて黒子に徹したり、子どもや保護者と直接関わったりすることで参加者に刺激を与え、活動全体に活力が生まれた。学生自身がスタッフとして自信をつけていったことが講座を運営していく上で大きな助けとなったことは間違いない。もっと言えば、サタデースクールの活動において、学生スタッフはなくてはならない存在である。たとえば欠席が続いていたある家族が、学生スタッフと遊んだことをきっかけに交流が続き、保護者の活動への協力姿勢が見られるようになったことがあった。保護者は安心して子どもを大学生にまかせ、そのような親の姿勢に子どもも安心して大学生と遊ぶ姿からは、学生を信頼できる若者として見ている様子がうかがわれた。子どもにとっても保護者にとっても学生の存在は

大きく、学生という異邦人性が適度なクッションとなっていた。

講座がはじまった当初は、「参加者に楽しんでもらえるようにしたい」という意識が強かったようにみられるが、それが「いろいろな人とかかわりの楽しさ」や「共に育てあう喜び」を共に感じたいというように、スタッフの意識も変化していったと考えられる。

3 子どもと家族が育つ

本講座の基本は、親子で同じ活動を一緒に体験することである。親が楽しい、子どもが楽しいという様子をそれぞれ見たり、同じ体験をして楽しんだりする開放感が、親子の安心感や信頼感へとつながっている。「家では、あれはだめ、これはだめと、怒ってばかりいるが、ここでは親子一緒に遊ぶことができて楽しい」という言葉に表れているように、指示語が多くなりがちな保護者の気持ちも、サタデースクールでは変化している。

「子どもが花植えと釣りが楽しかったというのを聞いて、うちにも畑はあるけれど子どもと一緒にゆっくり土を触る時間はなかったなあ。つい忙しくて子どもと向き合う時間を作らないでしまっていた」というような気づきも与えてくれている。

「たくさんの人と出会って話をしたり、自分以外の親の行動を見たり、視野がとても広がった」と感じている保護者も少なくない。他の親子と一緒に活動することで、わが子のよさや課題に気づいたという保護者もいる。親子という、ともすれば閉じそうになる家族関係に、学生や地域の熟年者という他者が活動を通して関わることで、風通しが良くなるからであろう。

また「父親と一緒に参加するようになり、父親と子どもが仲良しになった」、「仕事が忙しくなかなか子どもと遊べないが、休日はここで一緒に遊ぶことができてうれしい」という父親との関係が変わったという感想も多くみられた。「普段忙しいのでここでの時間が大切な時間になっている。子どもとお父さんと二人で何度か出席した。それが母としてはいろんな意味でうれしかった」という声からは、夫婦関係にも変化をもたらしている様子がうかがえる。

サタデースクールでの体験は、家庭での活動や遊びにも影響を与えている。

「サタデースクールは家族の生活の一部となっていて、教えてもらったたくさんの遊びを普段の生活の中に取り入れている」という意見も少なくない。「ゲームなどの遊びばかりだったが、昔の遊び、お金をかけない遊びなどたくさんの遊びを教えてもらい、いろんな遊びを覚えた」という感想は、保護者自身はどうやって遊んだらいいかわからないということの裏返しである。子どもはゲームで遊ぶものと思ってしまうのは、親世代だけの問題ではない。私たちの日常もまた、頭だけのヴァーチャルな生活にどっぷりつかっている。しかし、身体を動かし、人と関わっていくうちに、気持ちがときほぐされ、観察的な立場や関わり方から、感情をともなった当事者へと変化していく。「とにかく自然が良かった。昔はこのようにして遊んだなあと思い出しながら、自分が一番楽しかった。この講座はとてもあったかい感じがする」。春夏秋冬の季節感あふれる講座を体験しながら、家族もまた一人一人内なる自然を回復していったのではないだろうか。

ところで、平成 19 年度の最後の講座「おわかれかい」は、前年度と同様に子どもが一人ずつ館長から終了証をもらうというものだった。みんなに注目されて緊張を感じながら一人で終了証をもらいにいくという、場にふさわしい態度を学んでほしいという狙いからである。人数が多くかなり長時間になったにもかかわらず、全員が一人一人を注目していて、最後まで飽きることなく過ごしていた。子どもたちの成長をよく表しているできごとである。

また、この日の最後に学生スタッフへのサプライズ企画が実行された。ひとつ前の第 19 回の講座で、里仁館スタッフから各家族へ、サプライズ企画への協力を依頼する 1 枚の紙が渡された。「おわかれかい」の最後に大学生へプレゼントする手紙や花を作ってきてくれるようにという内容のものだった。最終講座の朝、それぞれの家庭で作ってきた花や手紙を、大学生に知られないように別室でとりまとめたのは母親たちだった。臨機応変に行動できるようになったのは、スタッフばかりではなかった。こうした家族の行動の裏には、楽しかった、ありがとうという感謝の気持ちがあったことはいうまでもない。これは家族としてのまとまりや他の家族とのつながり、参加者の積極性が端的にあらわれているできごとであった。

ある家族が「家族の間で心の距離が縮まった」といった感想を書いてくれたが、互いの心の距離が近くなったからこそ、他の家族とも自然に、素直につながることができたのであろう。

4 地域が若者を育てる

サタデースクールが地域の自然・文化・歴史資源を活用し、また多様な世代の人が関わって行われているということは、子育てを地域に開くということであり、地域で次の世代を育てていくということに他ならない。ここでいう地域とは、歴史性と固有性をもった私たちが生きる空間としてのそれである。

講座の講師は、開講以来、地域で活動しているその道の専門家に依頼してきた。また、運営面では前述したように東北公益文科大学の学生をはじめ、里仁館講座受講生、教師経験者で組織されている「教育フォーラム」の熟年者、地元の中学生や高校生のボランティアなどに協力を依頼した。

たとえば「こども冬まつり」(1/19)は、昔の正月行事や遊びを体験するという内容だった。里仁館講座受講生や教育フォーラムの熟年者が昔遊びのコーナーや餅つきを担当し、また、参加家族の父親たちにも遊びのコーナーを担当してもらった。さらに、通常はスタッフとして関わってきた学生スタッフがよさこいソーランの踊りやアカベラを披露し、学生スタッフという立場とはまた異なった姿を見せた。

熟年ボランティアといっても補助的な役割ではなく昔遊びの指導者として関わってもらうことは、活動への強い動機づけとなる。また、父親にもコーナーを担当する責任者として関わってもらうことで、参加者が自ら一緒に作り上げるという方向性をはっきりと示す機会ともなった。役割を固定させるのではなく、柔軟に活動を作っていくことで多世代間の交流を図ることができた講座だった。

サタデースクールを振り返って、ある保護者は次のようにいう。「地域が密着していてあたたかい雰囲気がある。おじいちゃん、おばあちゃんが近くにいるので、サタデースクールに来て地域の人たちと交流できることがうれしい」。高齢者を含む地域のいろいろな年齢層の人が自分たちに関わってくれて

いると感じられることは、子育ての楽しさや大切さだけでなく、生活していく上での保護者の大きな安心となる。それは熟年者や若い世代にとっても生きがいや活力になったり、癒されたりすることにつながるだろう。

こうした世代間交流ができたのは、臨機応変な対応がとれるように成長したスタッフや参加者がもつ安心感によるものと、子育ての支援という共通目標の存在が大きいと考えられる。

地域で子どもたちを見守り育てていこうとすると、若者の力は大きい。学生スタッフは子どもたちの人気者だったが、少子化で兄弟姉妹が少ない今日では、子どもたちにとって父親や母親よりも若い、身近な成長のモデルとなる。と同時に、若者にとってもまた保護者や他のスタッフ、協力者は成長のモデルとなる。

サタデースクールに参加して「忘れていた懐かしい気持ちがよくえった」という感想を述べた学生スタッフがいた。また、「子どもはうるさいだけだと思っていたが、サタデーを通して好きになってきた」、「子どもっていいな」とストレートに表明した学生もいる。学生が地域で親子と一緒にさまざまな活動に関わってきたことは、彼らに大きな自信を与え、本講座以外でもさまざまな活動に積極的に取り組む姿が見られた。子どもや保護者に慕われ、自己評価は確実に高まっていると考えられる。

自分の意思や好みで選ぶ友人とは異なる、年齢も背景も異なる人たちとひとつの活動を作っていくことは他では得られない異交通の機会であり、まさに地域に育てられていることである。多くの学生はこの地域が大好きになったといい、中には実家のある地域よりも親しみを感じるという学生もいた。地域を見るまなざしが決定的に変わったのである。見るべきものがある観光ガイドにのっているような地域としてではなく、子どもも親もおじいちゃんやおばあちゃんも生活している、〇〇ちゃんのいる“顔の見える”地域である。

そのように考えると、中学生・高校生ボランティアの活躍の場面や大学生と一緒に活動するような場面をより多く設定していくことは、今後重要である。また、スタッフミーティングの中では、サタデースクールを経験した小学生によるプチリーダーを育成したらどうかという話題も何度か出された。実現には至っていないが、地域と共に子どもたちを育てていこうという趣旨と照らし合

わせてみれば、至極当然のことである。

このように常に発展的に考え、動いていこうということ自体、この事業のユニークな点だと考えられるが、それは地域に根ざし生涯学習という広い枠組みの中で子育て、人とのつながりをとらえているからに他ならない。そういった点で、里仁館という施設は今後大きな可能性を秘めていると考えられる。そもそもこのような活動が年々人気を博し、継続できたのは里仁館がもつ人脈のネットワークのおかげである。里仁館が地域の財産だといえるのは、里仁館という信頼に他ならない。

あるスタッフはサタデースクールのことを、「大きい家族のようだ」という。そのような見えないつながりを想像できることが、地域子ども達への関心や理解を生み、そのなかで共に育ち、共に育てていくことが実現されるのではないだろうか。

5 まとめにかえて

家庭や地域は生活の場である。無意識的に子どもを社会化させていく場が、家庭や地域社会がもっている役割であると考えられる。グローバルな都市化や情報化といった動きのなかで、家庭や地域社会はその関係や役割を大きく変化させてきたが、基本的な信頼関係を育み、現実の多義性や重層性に触れ、多元的な価値観をはぐくむ場として、家庭や地域社会が依然として重要であることに変わりはない。「家庭」「幼稚園・保育園」「地域」が連携・協力して子どもたちの成長を支援していくことは、子育てを園と家庭だけに閉じ込めてしまわないということである。

そしてそのような活動に若者が加わるということは、子どもとしての自分と大人としての自分を同時に体感しながら、親の姿を想い、子どもの姿を想うことである。親―子、先生―生徒といったストレートな関係性に閉じ込められがちな若者や子どもたちが、地域という“評価しない”関係性の中で主体的で積極的な行動をとるようになっていったことは、地域づくりという点でも示唆に富む。

登下校の見守り隊など、地域で子どもたちを育てていこうという動きが見ら

れるが、本事業は、子育てが地域に開かれるその一端を担ったものと考えられる。保護者を含む地域住民が安心して子育てに関わることができるようになることは、地域をつくっていくことそのものといえる。

(表1)「平成19年度 講座内容」

活動項目		講座タイトル	内 容
保護者が学ぶ幼児共育における共通目標等の講座		・開講式 ・閉講式	
		・子育ておしゃべり会	保護者同士の情報交換
		・子どもの成長と病気の話	医師や看護師による子育て講座
		・ネームプレートづくり ・おわかれかい	
子どもと地域の熟年者等との交流活動	軽スポーツ	・ミニおやこうんどうかい	体育館で親子一緒に運動会
	交流活動	・おはなばたけをつくろう	地域の熟年者との花壇作り
		・りじんかん秋まつり	芋煮会・眺海の森、里仁館受講生との交流
		・びっくり！マジシャン	科学マジック、手品、熟年者のマジック教室
		・子ども冬まつり	餅つき、旧正月行事を楽しむ、昔遊び
		・ゆきであそぼう	節分の豆まきや雪合戦
	他	・地域に居住する熟年者のグループの紙芝居・読み聞かせ・昔話	
親子で学ぶ自然・文化・芸術体験	野外活動	・子ども春まつり	眺海の森でウォークラリーゲーム
		・めざせ！つりめいじん	眺海の森の池でフナやイモリを釣る
		・いそであそぼう	加茂海岸でカニ・魚釣り・水産高校見学
		・こんちゅうだいすき	カブト・クワガタ・ホタル・オニヤンマなど
		・こども夏まつり	かき氷・綿あめ・ゲームなどの出店、盆踊り
		・かわであそぼう	水辺の楽校で水遊び・石拾い・笹舟作り

親子で学ぶ 自然・文化・ 芸術体験	芸術活動	・こどもげきじょう	人形劇、ハンドベル、読み聞かせなど
		・どろどろどろんこ	グラウンドで泥遊び・砂遊び・水遊びをする
		・キッザニアりんかん	おみせやさんごっこ
		・つみきであそぼう	勘太郎文庫の積み木、読み聞かせ
		・きのみでつくろう	木の実のリースや写真立てを作る
	料理	・スイーツ☆パーティー	オリジナルおやつをつくって味わう

註

- (1) 調査研究委員会は、筆者を委員長として、加藤真知子（庄内地区家庭教育専門員）、菅原律（酒田市保育所朝日園園長）、後藤司（庄内教育事務所指導主事）、渡部志津佳（前松山子育てサークル代表）の5名で構成され、ほとんどが毎回の講座にスタッフあるいは参加者としてかかわった。

引用・参考文献

本文中、「 」でくくられた家族やスタッフの感想は、以下の報告書からの引用である。

生涯学習施設里仁館『親と子のサタデースクール中間報告』平成18年度

生涯学習施設里仁館『親と子のサタデースクール報告書』平成19年度



「どろ・どろ・どろんこ」の様子



「めざせ！つりめいじん」の様子